



TITLE:

人文 第46号

AUTHOR(S):

CITATION:

人文 第46号. 人文 1999, 46: 1-48

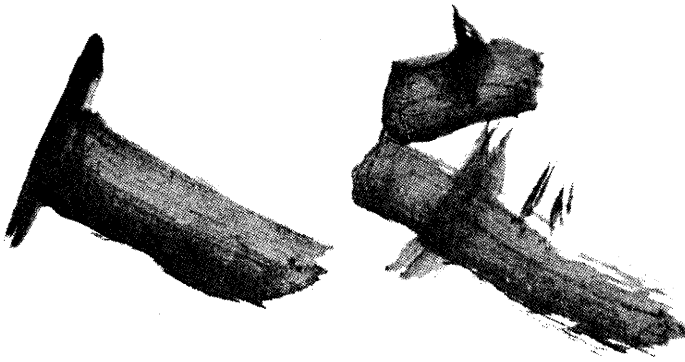
ISSUE DATE:

1999-11-18

URL:

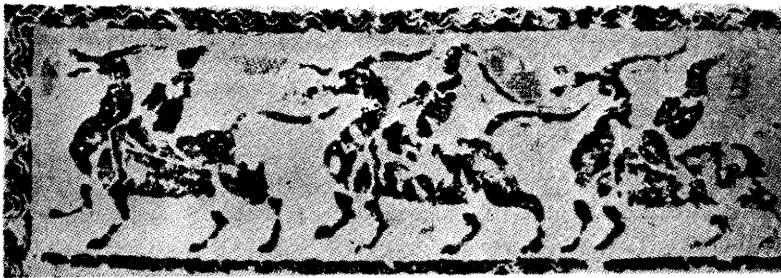
<http://hdl.handle.net/2433/57172>

RIGHT:



第四六号

創立70周年記念



1999

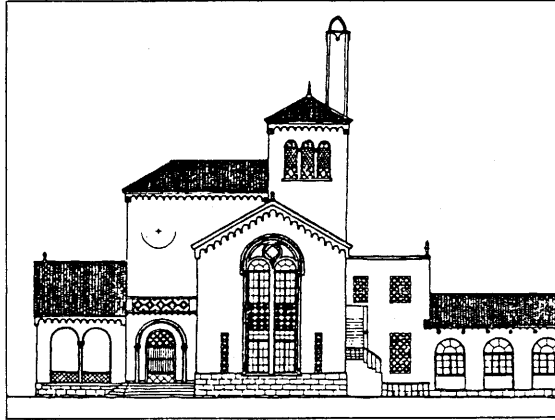
京都大学人文科学研究所

ISSN 0389-147X

人 文 第四六号

創立70周年記念

も く じ



所長あいさつ

葉山 正進

2

人文科学研究所略年譜

4

人文研の思い出

日独文化会館のころ

加藤 秀俊

5

藤岡班長、ありがとう

樺山 紘一

6

思い出の塔

斎藤 清明

8

人文研と私

杉本 憲司

10

人文回想

高橋 利子

12

書庫のこと

田中 久子

13

宿直の一夜

鶴見 俊輔

15

よく学びよく遊んだ助手時代

松尾 尊兌

16

東方文化研究所のころ

村上 嘉實

18

《座談会》

人文回顧Ⅱ

20

——二一世紀を展望して

阪上孝／吉川忠夫／横山俊夫／大浦康介／籠谷直人

金文京／富谷至／武田時昌／小山哲

（資料紹介）

小島祐馬旧蔵「対支文化事業」関係文書（解説）松田 清

35

個室と共同研究室

桑山 正進

北白川の建築計画をしていたとき、個室というものがよくのみこめず、どのくらいのものを描けばよいか相当迷ったらしい。メデイーションできればよいとの狩野先生の言葉で決まったというようなことを、どなたか先輩の先生が本館新築記念号の座談会記事でいっておられたように記憶する。いまや個室はメデイーションの場どころか、作業場のような感じになっていて、メデイーションは作業の中でやっているというのが、個人的な実感である。狩野先生の時代以来、研究所が経てきた年月の厚さと研究情況の変わり様にいまさらながらおどろく。人間の思考の根本は変わらないし、研究の質も変化しているはずはない。情報があまりにも整理されずに多くなったことだけが変わった面であり、それで落ちついて考える時間が乏しくなっているとしたら、なんとも情け無い。

研究所はひとりひとりの研究者がそれぞれの分野で地道に研究を進め、おおきな成果を蓄積してきた。いま伝統のうえに自由な研究を進めることができるのも、実にこの七〇年にわたる研究所の先学



がその時代時代の困難を経て研究の環境を注意深く守り、受け継いできた賜物である。先学に深甚なる敬意を払い、今後なお一層の展開をはたすためにもわれわれの責任はおおきいことを知らねばならない。そういった個人の研究をするのにいまや個室なしの情況は到底考えられないのだが、一方で思うに、個室ばかりが並んでいる状態が果たしてよいのかということがある。個室における研究の関心と拡がりなどから、さらに多くの分野の異見を求めて動く共同研究は、研究所を研究所たらしめている車輪のひとつであって、研究のよい形式をわれわれはまたもっている。北白川の建物についていえば、考古、歴史、科学史など六つの研究室は助手の二人部屋、いわば個室同様にいまなっている。創建当初こういった研究室がどのような経緯でつくられたのかは別にして、その配置はよく建物に調和をあたえている。と同時に、これは研究自体に対しても、文化交渉地帯、ないし緩衝地帯としての役割をもってきたようにおもう。いまその機能は個室化とともにうすくなってきたのであるが、あらたな時代にむけて、共同研究室の意味を考えてみるのも無駄ではあるまい。



人文科学研究所略年譜

- 1929年 4 月 東方文化学院京都研究所（外務省管轄）発足。
1930年11月 所屋完成，開所式を開催。
1931年 3 月 『東方学報』創刊。
1934年 3 月 独逸文化研究所，東一条に所屋完成，開所。
1934年 4 月 『東洋史研究文献類目』を刊行（その後『東洋学文献類目』に改める）。
1938年 4 月 東方文化学院東京研究所と分離して東方文化研究所として独立。
1939年 8 月 京都帝国大学に人文科学研究所附置。「国家ニ須要ナル東亜ニ関スル人文科学」の研究を目的とする。
1941年 3 月 『東亜人文学報』創刊。
1945年10月 独逸文化研究所所屋，米軍に接收。西洋文化研究所に改組。
1946年11月 西洋文化研究所解散，建物・設備を京都大学に寄付。
-
- 1949年 4 月 東方文化研究所，人文科学研究所，西洋文化研究所が合体して，京都大学人文科学研究所が新発足。「世界文化に関する人文科学の総合研究」を目的とする。
1949年 8 月 市民向けの「人文科学講座」を開催。のち「夏期講座」に引き継がれる。
1950年12月 『人文学報』創刊。
1952年 7 月 旧西洋文化研究所所屋，米軍の接收を解除され，人文科学研究所分館として使用開始。
1957年 3 月 欧文紀要『ZINBVN』創刊。
1965年 4 月 東洋学文献センターが開設。
1975年 5 月 東一条に新所屋完成，本館と称する。
1978年 客員部門として比較文化部門を設置。1985年には同じく客員部門として日本学部門を設置。両部門により恒常的に外国人客員を招聘。
1995年 4 月 文学部の文学研究科への改組に際し，協力講座として参加。

日独文化会館のころ

加藤 秀俊

わたしが人文の助手として採用されたのは一九五三年のことだったが、当時、日本部と西洋部は東一条の旧日独文化会館のなかに所在していた。木造二階建てで設計はなかなかしゃれていただけれども、造作がわるくて床はギシギシしていた。そのうえ、終戦直後からしばらくアメリカ占領軍に接収されていたものだから、二階の会議室の壁面には、なにやら派手なペンキぬりの絵がのこっていたように記憶する。

この建物のあちこちの研究室を転々として、それからの一六年間をすごした。できるだけ異質な人間たちが交流できるように、というので、毎年のように「部屋替え」があり、さいしょは森口兼二さん、つぎは本山幸彦さんと同室させていただいた。もともとが研究室用につくられた建物ではなかったから、各部屋ごとに規模もちがうし、設備もちがった。大部屋あり、小部屋あり、そしてちいさなくに廊下などが入りくん

でいたから、まことに複雑でおもしろかった。

助手はふたり相部屋ときまっていたけれども、こんなわけで部屋の条件がちがっていたから、どれだけの空間をあたえられるかはわからなかった。二階の東南の角の部屋はとりわけおおくで、ここは三人、ときには四人がわりあてられていた。どれだけの期間だったか失念したが、この大部屋に多田道太郎さん、山田稔さんと三人ごいっしょしていたこともあった。

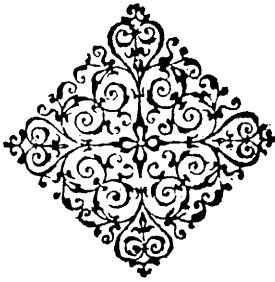
その大部屋から廊下をへだてて、むかいがわに「屋根裏部屋」とでもいうべきちいさな部屋がひとつだけあった。ここは元来が居室として設計されていたものではないらしく、広さは四畳半でいどだったが、ここはもの好きな所員が自由に申し出てつかうことができていたようだ。なにしろ、西むきなので、夕方になると暑いうえに天井もひくい。この部屋を使用しておられたのは、まず鶴見俊輔さん、つづいて藤岡喜愛さんだった。鶴見さんは、ときには研究室で徹夜されることもあるらしく、机のうえにキユウリのかじりかけがおいであつたりもした。藤岡さんのころはロールシャッハ・テストの素材が山積みされていた。

藤岡さんが甲南大学に転出されたあと、わたしがこの屋根裏部屋に入居した。ちょうど電気計算機の第一号が発売されたころで、ネオン式の表示板をみながら

統計処理をしたのもこの部屋であった。のち、わたしが教育学部に転出したあとの「後継者」が樺山紘一さんであったことを知った。

人文をはなれて、これで三〇年。あの旧日独文化会館は、わたしがでてからまもなくとりこわれ、そのあとにいまの建物があるのだが、わたしにはむかしの木造の時代のイメージのほうがはるかに優美で鮮烈なのである。

（一九五三年九月―一九六八年一月）
日本部助手 現在、中部大学学監）



藤岡班長、ありがとう

樺山 紘 一

もう三〇年ちかくも昔の話となっていました。そのころ、人文研には「助手共同研究班」というのがあった。ことの起こりは、たいそう複雑で、いわゆる学園紛争と関連があるが、ここでは省略しておこう。当時の助手の多くが参加した共同研究なのだが、いまから考えれば、ただ若手不満分子のためにもうけられた、離れの一室だったかもしれない。「現代における知識の意味」という標題だった。もともと、いかにも肩に力がいっただけのテーマは、ほんとうはどうでもよかったのだろう。

研究班だから、班長がいた。精神人類学者の藤岡喜愛さん。助手だというのに、わたしなどよりはるかに年長。この大班長にすっかりと酔ってしまった。いちばんの後進にしかかったから、年齢だけで圧倒されたともいえるが、どうしてどうして、同僚の悪童助手たちも、ほはおなじ事情だった。前研究所長も前々所長

もふくめて。ほかにも、のちに研究所をささえる屋台骨になるべきひとたちが、ずらっと並んでいた。そのみんなが、藤岡班長にひれ伏し、いやときには駄々をこねてお叱りをうけてもいた。

それには、訳もあった。われらがボスはただ理屈をこねる人類学者にみえ、わたしたちはおおいにその理路について異論をこころみただが、その夫人にはいかようにも抗したいところがあった。夫人は小児科医だったのだ。鞍馬口通りにかまえる町医者看板をわたしたちはしばしば叩かざるをえない。というのも、助手連中のおおくは、嬰兒か幼児の父親でもあった。班長よりも早世された夫人は、ほんとうに慈眼というべき優しさで患者を検診してくださった。ただうろたえるだけの両親は、その適切なアドバイスに、心服してしがつた。

聴くところによれば、研究所の先輩たちは、著名な町医者であり、偉大な思想家でもある松田道雄先生のクライアントだったそうだが、わたしたちも藤岡夫妻の顧客だったのだ。それも、小児科だけではなく、精神人類学研究上のインフォーマントとして。

研究会という名の雑話会がはねたあとは、むしろ酒席にうつった。丸太町橋西詰めにあったおでん屋さん、いまはもうなくなっているだろうか。藤岡御大が、

ちよつとタイミングがずれた講評をくだすごとに、わたしたちは爆笑したり、反抗したり。あらかた時計が翌日にうつってから、河原の千鳥よろしく、鴨川沿いの堤道を三條京阪の駅まで歩いたつけ。

おじさんの悪いくせで、また昔話をしてしまった。だが、わたしはそこから大事なことを学びとった。共同研究のうちには、こうした密着した人間関係が有効に機能するものである。ただし、それは当事者がみな水平関係だと自覚、もしくは誤解しているときだけに有効なのだ。いまの人文研に、助手共同研究班があるのかどうか知らないが、この原則が適用できる場所を保存してほしいと願う。というのも、わたしはまだまだに、その研究班をなけなしのわが学問にとつての母郷だと確信しているからである。

(一九六九年二月～一九七六年三月)
(西洋部助手 現在、東京大学教授)

思い出の塔

斎藤 清明

北白川の分館の屋上へ、今春、国際シンポジウム「人文学の新时代」の際に、初めて登らせてもらった。大文字や東山の山なみが、まづかに迫ってきて、いい眺めだった。送り火の際には素晴らしい見所になるのだらうと、往時を思ったりした。

三十五年前に京大に入った際に下宿したのは分館の近くだったが、あの瀟洒な建物には目を見張ったものだ。これが、由緒のある大学の研究所というものなのか、と。不勉強な学生にはとても縁などありそうにもなく、卒業のころまでは敷居が高かった。なかでも、あの塔屋は、いつも仰ぎ見る日々だった。

私は、今西錦司先生たちのサル学や山岳部などの雰囲気憧れ、京都に来ようなもの。当時、今西さんは東一条の人文におられたのだが、あの旧ドイツ文化研究所だったという建物にも、在学中はとうとう訪ねそびれてしまった。すぐ近くの西部構内のクラブ（山岳

部）ルームには入り浸っていたというのに。

人文の先生がたにお目にかかるようになるのは、教育学部に学士入学して後のこと。ちょうど、加藤秀俊先生が人文研の所員（助手だったとは、それまで知らなかった）から助教授になって来られたばかり。まだ紛争が続いていたのだが、加藤研究室は雰囲気よかったので、専攻を変えて入れてもらった。

加藤さんにくっついて、信州へ農村調査に出かけた、国際未来学会のアルバイトをさせてもらったりと、楽しかった。このようなのが人文の学問のやり方なのだらうかと感心したりした。

吉田光邦先生の「日本教育史・研究」も受けた。講義室をほとんど使わずに、西陣や清水、信楽などに出かけて、伝統産業や職人さんの仕事場を案内していただいた。講義時間は土曜の一、二限目だったが、昼過ぎから夕方までも、半日がかり。まさに、現地講義だった。後に新聞記者になってからうかがうと、「あんなゴージャスな講義は、君たちだけだったよ」とのたまわれた。

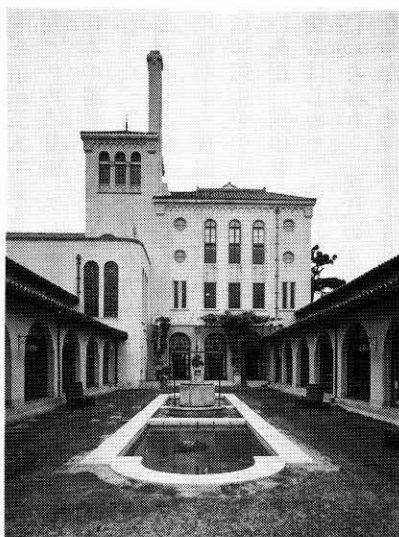
というわけで、人文に出入りするのには、「時計台詰め」の記者になってから。取材と称して、本館、分館を問わず先生がたの研究室によくお邪魔させてもらった。いつもお抹茶を入れて下さった柳田聖山先生、話

がはずんでいつの間にか夜更けになっていた福永光司先生はじめ、思い出が多い。吉田班の共同研究会をのぞかせてもらったが、いつも明け方まで付き合いらったのも懐かしい。また、藤枝晃先生とは、晩年まで入院された後も電話をいただくようになった。

大学記者クラブにいたころの一九七九年度の文化勲章・文化功労者は人文の二人の名譽所員が受けたが、今西さんは森のようにうつそうと繁る自宅の庭で、桑原武夫先生は人文（東一条）の会議室で、それぞれ記者会見されたのが印象に残っている。また、今西さんの山行によくお供をしていたが、学生時代にかがえなかった本館での会合にも参加した。上山春平先生の肝入りで、今西さんが自らの学問を「自然学」としてまとめるための勉強会だった。

そのころ、「京大人文研」の執筆依頼が、東京の編集者から舞い込んだ。人文時代の梅棹忠夫研究室を描いた藤本ますみさんの「知的生産者たちの現場」がなかなかの評判で、その余波を受けたようなものだった。なんとか、私が付き合せてもらった先生がたを中心に描いたのだが、入学したときに見上げた塔屋の印象が書かせたのかもしれない。

（毎日新聞編集委員）



人文研と私

杉 本 憲 司

人文研との出会いは、終戦後まもなくの頃で、日本考古学協会の大会が人文研二階の講堂で行われ、その日夕方から水野清一先生が中心になって、中国考古学に関心ある人々が一階会議室に集り研究発表があった時に、もぐりこみで話を聞いた時と思う。その後、早くから存じ上げていた岡崎敬先生の研究所東北隅にあった研究室にかよい、本を見せていただきながら、新しい中国の情報、更に、当時、水野・長廣敏雄両先生が手がけていらつしやった雲岡石窟の報告書の作成、イヤパの調査の準備から出発、帰国などを横目で見ながら、部屋にこられる多くの先生方の話を聞かせていただいていた。このような状態が、私の大阪大学の学部・大学院時代、人文研の助手が岡崎先生から林巳奈夫先生と変っても続いていた。特に夏休みなどは毎日のように人文研にかよったことがあり、八月一六日の大文字の送り火の時には、水野先生の奥様からジ

ャージャー麵のご馳走があったこと思い出す。

その頃、長廣先生が漢代の芸術と思想班の研究会を始めるので、これに参加しないかと樋口隆康先生を通じておさそいをうけ、早速これに参加させてもらうことになった。この時には高校教師をしていたので、週一回の研究日をいただき、当時、中国考古学関係の本を私的に二人で読んでいた秋山進午さん（大手前女子大）と共に参加し、研究会の講読だけでなく、画像石拓本の整理、写真による画像石画題別分類整理なども行った。この研究会は夕方から始まったので帰宅が夜おそくになったことを思いだす。その後、研究会が画像石から画論に研究の中心が変っていった頃から、別に林先生を中心に、文学部の樋口先生の研究室で、樋口先生、秋山さん、西川幸治さんと共に『三禮図』を読みはじめた。これが、後に人文研の林先生の研究班につながり、『漢代の文物』という名著を生むことになった。その後も林班の研究会に続けて参加し、林先生退官後は、永田英正さんが中心になった漢代石刻碑文会読の班に加わり、これが今日の梅原郁さんの法制史班、富谷至さんの辺境出土木簡の研究班に続いているわけである。

数えてみると五〇年近い、外者の人文研通いは、私にとって大きな知的興奮を覚えさし、これ位学問的刺

激の多い場所はなかった。新設大学の学生で先輩がなく、桑田六郎・守屋美都雄両先生以外、学問的な雰囲気来接することが非常に少なかった中、個人的な人の連ながり、人文研に連ながりを持つことができたわけであるが、昔の人文研は研究班の講読、研究発表以外に、各研究室での先生方とお話しをする機会が多くなり、私にとって大変な耳学問をすることができた。前にあげた先生以外に、貝塚茂樹、日比野丈夫、福永光司、藤枝晃、森鹿三、吉田光邦などの先生方の博識な話しは、研究に関することだけでなく、学界、世界情勢、世間話と広い分野に及び、学問・学界・俗世界のトップの話しであったことと思います。

（佛教大学教授）



人文回想

高橋 利子

一九四六年三月図書係として勤務、当時、図書室は、文学部本館中庭の北側の一室にあり、西隣の教室に漢籍、同館二階の一室に和洋書、同東館にも満鉄、東亜研究所等から寄贈の二次文献を収納していた。

この頃受入業務は、附属図書館が掌握していたので、登録の都度、供用命令書、支出負担行為書と共に、天秤棒の両端に本を入れた柳行李を掛けて、用務員さんに運んで貰う有様であった。整理業務は、小島祐馬所長を慕って東方文化研究所から移って来られた鈴木隆一氏、時勢に便乗することなく、儒教精神を貫き、停年迄勤められ退職後は、京都精華大の図書館長を勤められた立派な人であった。和洋書は、往年の学生運動の闘志長谷川章子さんが、定期刊行物の受入、整理、書物の排架その他の雑務の担当を田中さんが、この人の後人として、私がその仕事を受継いだ。

聞くとところによると、終戦迄は、哲学者の真下信一

氏等が在籍、旧人文の図書分類表は、同氏により作成された。

一九四九年桑原教授を班長に、共同研究『ルソー研究』を始められることになったが、必要な図書は当所に殆んど無く、文学部をはじめ他大学へも公用借用を依頼し、溝川助手は、着任早早リュックを背に借用に出向かれた。一方桑原教授は『速習フランス語講座』を開講され、図書係から長谷川さんと共に受講させていただいた。間もなく彼女は退職、岩波、平凡社と編集者としての道を歩まれた。

その後、多田道太郎先生が、ルソーの『言語起源論』の講読をされることになり、テキストをタイプでステンシル・ペーパーに打ち、輪転機で印刷、受講者に配付するのも私の仕事で、この講読にも参加させていただき働きつつ学ぶ大変恵まれた職場であった。

一九四八年大学に職員組合が結成され、河野先生は当時の名書記長、事務の田中、長谷川の両氏も支部結成に尽力、人文は常に最前線にたっていた。同年京大全学ストには、街頭に進出、ストに突入した経緯を市民にアピールした。この頃は主として経済闘争であった。聴て時の流れと共に、組合員も減少、職員の親睦をはかる為、白牛会が誕生した。

合体の頃は、貧困時代であったが、本館と分館の親

交の為、忘年会を本館講堂（現・センター閲覧室）で女子職員手作りのカレーライスをご馳走に、それでも結構楽しく、その中ダンスをする人、寸劇を披露する人、中でも吉田光邦氏の「すみれの花咲く頃」を自己陶醉の表情で唄われた上、タイツを穿いて踊られた姿は今尚鮮明に脳裡にしみついている。一九五五年頃から急速に復興する世相と共に、白牛会主催の忘年会も楽友会館やホテルを会場に盛大に行われるようになった。

（一九四六年三月―一九八四年）
図書室職員



書庫のこと

田中久子

濃緑色二分冊のページを繰っても、一年有余の漢籍カードの書写作業がどの部分を占めているのかを理解するには、少々時間がかったものである。この漢籍分類目録の上梓後に私は初めて書庫に出入りすることになった。川勝義雄・竺沙雅章両先生と図書掛職員と私の四人は、カードボックスを携えて書庫に入り、照合した書架の本に排架番号を付した。この番号は、四部分類排列を知らない図書掛員にとって、後日閲覧室が公開されてからはとても重宝したものである。書庫内の題箋を揃えた紺色の帙の並びはともきれいに見えた。当時の鈴木隆一図書掛長に「これだけの時間いるのだったら、もっと早くに図書のことを教えておけばよかった」と言わしめた私と、所蔵漢籍との初対面であった。それからは何度書庫の扉を出入りしたことであろう。

今は昔の、閲覧者も少なかった頃の事。ある時、那

波利貞先生が見え或る書を要求され、「何階の何側の何列目の何段目あたりの何とか叢書の中」とおっしゃった場所からその本を取り出した。ずっと後に書架移動をして所員の先生から「見にいったらそこに本がない。相談もなく本を移動されたら困る」とお叱りをうけたこともあった。先生方の頭の中には目録は勿論、排架図が存在していたのだ。ある時、篠田統先生が幼いお孫さんをお連れになり、「ぢいの勉強した書庫を見せてやってください」と丁寧に許可を求められた。

そういえば古くは、書庫とは女子供の入るべき所にあらず、と言ったとやらと聞いたことがあった。排架番号記入の折、三層での本の移動に梯子の最上段に立ち棚板の調整をしたが、どんなに怖かったことか！その時こそ先人の言葉を妙に納得させられた。ある時、吉川幸次郎先生が見え、「散歩の途中で思いついたので、こんな失礼な格好で申し訳ないが」と入庫のことわりを述べられた。見れば先生は着流しのままでおられた。近藤光男先生の書庫見学は雪のちらつく日で、連れの学生さんの薄いワンピース姿に、どうぞコートを着たままでと言うと、先生は即座に「いや、書庫にはきちんとした格好で入れて頂くものです」とおっしゃった。上記の先生方は偶然にも所員ではなかったが、当時所員の一例では、二人でカード検討中に突然「漢

文やったら読んだげまひよか」と桑原武夫先生の声があったこともあった。雑誌の背を見にこられた先生はそのついでによく小さな雑談をしてくださった。

先生方は一々細かな事をおっしゃらなかった。しかしこうした会話や雑談が、先生方の書庫と本に対する態度を暗示し、ひいては私自身の図書室教育であったようだ。最近でもふと事にであった時に、文字のマニユアルではなく遠い日のあの先生の言葉だったと思い知らされる。あの頃、東方部の二階は書庫と司書室・講堂と呼ばれていた。先頃改装された建物の中で、この日時計だけはあの日のままだと、私は今年の夏季講座のポスターを見つめた。

（一九六二年四月―一九九七年三月）
（東洋学文献センター事務掛）

宿直の一夜

鶴 見 俊 輔

一九四九年四月一日、私がつとめはじめた京都大学人文科学研究所分館は、図書館の前赤レンガに木造モルタルづくりを足したたてものだった。

今はなくなってしまったが、私の中の愉快な思い出である。

この木造モルタルづくりの部分に西洋部が入り、二階の行きどまりの二人部屋が紀篤太郎助教授と私の共用の研究室だった。となりが桑原武夫教授の部屋で、一階には十人あまり入れる議論のできる部屋があつて、そこで、西洋部の主な仕事であるルソー研究があつた。

大図書館には総合索引カードがあつて、京大に何の本があるかを見わたせた。本がばらばらにあることにおどろいた。行き先をたしかめて、ちがう建物にあるそれぞれの学科図書館に行くと、時間はかかるが、本をさがしあてることができた。たとえば、バーコフの『美の尺度』という本を、理学部数学科の図書室で見

つけることができた。バーコフが一九二〇年代からの数学者であつたことから、これを数学の論文と考えて発注されたものだろう。ついたのを見て、美学の本であることがわかり、誰も読む人なく、ここにおかれていた。

ペリーの大著『価値の理論』は、農学部図書室にあつた。農業経済学の参考になると考えられたのだろう。デューイというと哲学者という連想がはたらくのだらうけれども、価値論の論争相手だったラルフ・バートン・ペリーというと、哲学との連想から切りはなされて、ここにおかれていた。

当時、人文科学研究所西洋部には本が少なく、私は、自分の仕事にかかわりのある本を見つけるために、京大の校庭を横切つて、見知らぬ建物の中を案内をこいつつあちこちして本をさがした。そのうちに、京大をひとつの小さな大学と感ずるようになった。途上ことをまじえる人も多くなり、数学の山口昌哉、経済学の山口和哉、そして動物学では梅棹忠夫とつきあいが生じてから川喜田二郎、河合雅雄（当時は学生）たちの雑談の中に入ることになった。学科を横断する気風が、そのころの京大にはあつた。それが、当時の私にはたのしかった。

木造の建物から校庭の外のドイツ文化研究所に移動

することになって、私にわりあてられた研究室には、莫大な数のナチスの著作があった。うまれてからこんなに多くのナチスの文献を見たことはなく、そのいくらかは手にとって読んだ。

移転直前の日々、二つの建物を用務員さんがうけもつのはむずかしいので、教員が宿直することになり、会田雄次さんと私がくんで夜にあたった。

会田さんはゆっくりはなしをするつもりで夜たべる菓子類をたくさんもってきて、深夜にいたるまで、自分の捕虜体験にうらづけされた西欧ヒューマニズム不信を語った。名著『アーロン収容所』のあらましを、発行の数年前に私はきいたことになる。

（一九四九年四月―一九五三年二月）
（西洋部助教授）

よく学びよく遊んだ助手時代

松尾 尊 允

私は一九五三年一〇月から一九七〇年末まで一七年余人文に御厄介になった。うち一二年間は助手であった。学生時代から寒くなると鬱病状態におちいる習性はこの間も続いたが、思い出すのは楽しいことばかりである。

大学を卒業したら田舎教師になるつもりで、雑多な本を読みちらしたり、デモに加わったりでロクに専門の勉強をしなかった人間にとって、人文は大学院のようなものだった。指導教官は井上清・渡部徹の両先生であった。井上先生からは「戦略」を、渡部先生からは「戦術」をそれぞれ主として学んだ。私の学問の骨格はこの助手時代に形成された。人文は私にとっては、他家に嫁いだ娘の実家のようなものである。

助手の日常的義務は週一回の共同研究会への出席だけであった。私は仕事が忙しくなると自宅に籠り、研究会の日だけに研究所に出かけた。朝一〇時頃小会議

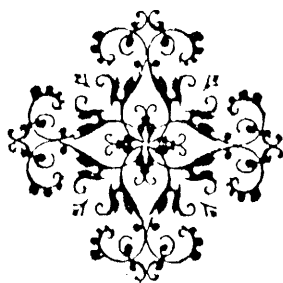
室に入り新聞を読んでいると次第に人数がふえる。やがて桑原武夫・井上清両先生の登場となる。桑原先生は、久野収・丸山眞男氏とともに日本三大オシャベリといわれたが、井上先生もひけをとらない。たちまち両者の間に打打発止の論戦が始まり、一同聞きはれていろいろちに正午となる。「もう昼か、ピンポンでもやるか」でお開きとなる。当時大会議室には二台の卓球台があり、一台は全学から集る腕達者が占領していた。研究会が終ると、助手達は二階の大部屋（多田道太郎・加藤秀俊・山田稔）に集まりポーカーに興じた。やがて席は居酒屋に移る。そのうち私は多田道太郎・樋口謹一両氏から麻雀を仕込まれることになる。席主は桑原班の黒田憲治さん。橋本峰雄和尚も常連だった。このあたりが「日本映画を見る会」の幹事メンバーでもある。この会については他の場所ですいたこともあるので、ここでは繰返さない（『創造する市民』29）。

よく学びよく遊んだ助手時代は、私の生涯の幸福な一時期であるが、それを可能にしたのは、前記の有難い勤務条件であった。私は文学部に移っても、講義は週一回に限定した。他校への出講は集中講義以外は一切引受けなかった。普通能力しかもたぬ私には、週に二回の共同研究会、もしくは講義という負担では、とうてい今日までの業績はあげることができなかった

であろう。一つの研究会もしくは講義に全力を投ずる。その結果を論文に発表する。それを積重ねてようやく人並の仕事ができた。

私が紛争中の文学部にあって移った遠因の一つには、義理にからまれて二つの研究班に加わらねばならなくなったことがあげられる。育ち盛りの助手のために、最低一つの研究班に属すればよいという条件が、将来とも維持されることを期待したい。

（一九五三年一〇月―一九七〇年一二月 日本部助）
手・講師・助教授 現在、京都橘女子大学教授



東方文化研究所のころ

村上 嘉實

東方文化（京都）研究所は、人文科学研究所の前身である。初代所長は狩野直喜先生で、そのもとに新進気鋭の研究員が居並び、なかなか数居が高くてよりつけなかった。しかし内に入ると案外自由で、私等（当時京大文学部東洋史の学生）でも書庫に入り、万巻に及ぶ漢籍の善本を自由に手にとって見る事ができた。

各研究室は昼間でも煌煌と明りを点し、いつも多くの来訪者があった。当時は殷墟の発掘や仰韶・龍山文化の解明もあって、特に考古学に活気があった。梅原末治氏はゴツイ眼鏡を光らせて、忙しく廊下を歩いていた。その後をついだ水野清一・長廣敏雄氏は、雲崗の調査に情熱を燃やしていた。或る日の夕方私は質問があつて急に考古学の研究室にゆくと、水野氏が一人調べものをしていた。私が質問すると氏は棚から本を出して読み、更に大きな本を引出して読み耽り、そのうえ二階に行つて書庫から本を取りよせ、私が側に立

つていることも忘れていたかのようであつた。私はついに答えをもらわずに帰つてきた。林巳奈夫氏から聞いた話であるが、水野さんがメトロポリタン美術館に行ったとき、館員が地下室に案内して中国の石碑を見せると、水野さんは丁寧なそれを調査し、ついでにその下の石碑も見たいと言ひ、次には横の石も見たいと言ひ、館員はへとへとになつたという。

吉川幸次郎・倉石武四郎の両氏は、北京の留学から帰ると、兩人とも支那服（清朝以来のもの）を着て百万遍あたりを闊歩し、研究所で講演があるときは、墨筆を垂直に立てて筆記した。恐らく漢文で書かれたのであるう。平岡武氏は研究室に大きなカードボックスを備えて、白居易や、唐都長安の研究に夢中であつた。正午になると狩野所長は全員を食堂（今の事務室）に集め、中国から呼びよせた料理人に作らせた中華料理で会食した。学問的な雰囲気、さぞ話に花が咲いたことであろう。

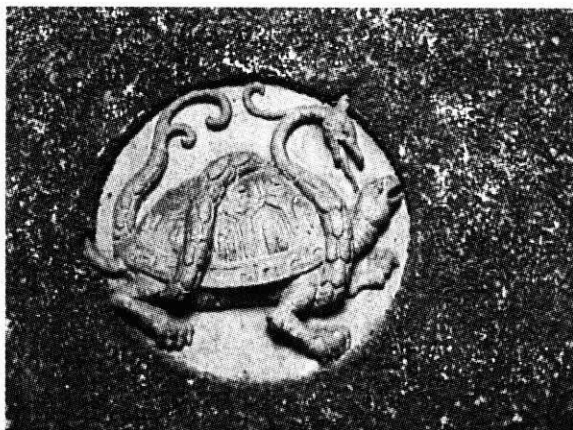
長い戦争が終つて、今まで断絶していた日中間の学事情が少しずつ判るようになってきた。終戦後間もないころ、中国社会科学学院の一行が、敗戦日本を訪れ、この研究所にもやつてきた。二階の講堂（現在文献センター閲覧室）で壇上に一行を迎え、研究員はその下に立つて挨拶した。一行の団長（郭沫若氏と記憶す

る）が、研究員の中に梅原末治氏を見出し、つかつかと近づいていきなり梅原氏に抱きつき、肩をたたいて長い間抱擁した。それはまことに感激的なシーンであった。日中学術関係の雪解けがここに始まることをはつきりと感じた。郭沫若氏の講演は、当時進行中の文字の改革で、例えば「滅」の字は「灭」にしたいと思う、と言ったようなことであつた。

台湾の民国からも学者（李濟・董作賓氏等と記憶する）が来訪し、その高邁な学説を披露した。

以上私の記憶を辿って述べたが、誤りがあれば正して頂きたい。

（関西学院大学名誉教授）



《座談会》

人文回顧Ⅱ

二二世紀を展望して

語り手

大浦 康介

金 文 京

阪 上 孝

富 谷 至

横 山 俊 夫

吉 川 忠 夫

聞き手

籠 谷 直 人

小 山 哲

武 田 時 昌

《旧館から新館へ》

武田 それでは座談会を始めます。本誌では、一九七五年に新館落成記念として座談会を行ったことがあるので、パートⅡということになります。今日は、それから今に至る約二五年間を回顧したいと思います。ただし、一回目は、御年配の先生方が創立以来の思い出を話されたのですが、今回は過去を振り返りつつ、

まもなく訪れる二二世紀のことを展望しようという趣旨で、世代横断的に集まっていたきました。まず所長を務められた吉川・阪上両先生にこれまでの歴史的な流れを概略的に語っていただきながら、人文研の将来像についての意見を自由に交換したいと思います。

阪上 日本部と西洋部については、本館が建った前と後では、ずいぶん違うと思います。二階建てだった旧館の時は、外観は美しいけれども、内部は難儀な建物でした。戦後すぐの頃にアメリカ軍に接収されていたなごりか、本棚にハワイの椰子の絵があつたりして、最初に助手で来たときは妙なところだなというのが印象でした。

横山 私も旧館に住んでいた一人ですが、裏に石炭部屋とかいう一室があり、お化けが出るとか、地下に進駐軍が埋めた女の骨があるとかの噂があつたところを見つけ出し、自分で片づけて勉強していました。

吉川 私がここに来たのは七四年でしたが、出入りは大学院の頃からです。当時は、この共同研究班が大学院の授業の代わりになっていたものもあつたんですよ。例えば雍正硃批論旨がそうでした。

阪上 旧館時代は、助手が二人相部屋だった。建物の西北に談話室と宿直室があつて、お茶を呑むとか、電話をかけるのにはそこにはとダメだったから、

いろんな人としやべる機会があった。新館ができて、
雰囲気はずい分変わりましたね。

横山 建物ができて、いよいよ部屋割りという会議
で、そばにいた藤枝晃さんがプランを見て、こりゃあ
かんで、みんな四畳半趣味になるがと耳打ちされた。
大部屋でワイワイやるのが、人文のスタイルだったん
でしょう。

富谷 東方は今でも相部屋ですよ。雰囲気はだ
いぶ違っているでしょうけど。

阪上 何々研究室とかでしょ。東一条では、分野の
違う者同士が同室になる。私は飛鳥井雅道さん、法学
部からこられた横山さんは確かシユメール学の前川和
也さんと同室だった。

吉川 東方も歴史研究室と言っても、住人は別の
こともある。

富谷 そういえば、私は宗教学研究でインド学の
赤松明彦さんと一緒でした。

小山 この特集号にいただいた原稿でも、相部屋の
話があつて、しかも勉強したという話があまり出てこ
なくて、ほとんど遊んだ話ばかりなんですよ。

横山 梅棹忠夫さんに聞いたら、研究所に行くと、
朝から晩までほんまによくしゃべったと言つてられた。

阪上 同室だった飛鳥井さんから、コミンテルンと

かの話を聞かされて、おのずと耳学問ができた。

富谷 突然にガラツと外部の先輩の先生がやつて来
られて、そして長時間そこにおられ、私にははなはだ
迷惑、ということもありました（笑）。

大浦 でも、そういうことのできる雰囲気のある開
かれた場所だったんでしょう。

金 人文の助手はそれでも文学部にくらべれば、恵
まれているでしょう。文学部は、雑用が多くて大変で
した。

阪上 よしあしもあるということでしょう。ずっと
居座られて、相手をしないとけないのなかなかわな
けれど、新しい知見も得られることもある。

籠谷 今は少し静かすぎますね。雑談するスペース
は確かにない。

金 東方のロビーなんかも、広いスペースに誰も
いなくてもつたいないと今日話してたんです。

横山 普段あちこちで雑談するというのは、案外大
事なことです。会話がないと、よけいな誤解も生じる
ことだし、将来構想なんかも雑談レベルでもっとやら
ないといかんね。

大浦 七五年の建物の変化が研究者自身のあり方や
相互関係の変化と対応しているということでしょうか。
阪上 それは、あるでしょう。残念ながら左翼の力



がどんどん落ちてきま
したね（笑）。進歩的
文化人がリードしてき
た総合雑誌が注目され
なくなり、論壇の力が
衰えてきたことも大き
いでしょう。日本全体
の変化の現れですね。

大浦 以前は皆がいくつかのテーマを共有していて、それで議論がはずんだ。数の限られた大きな話題、共通の関心事や問題意識があったように思います。ところが、情報が溢れ、知識が細分化されるようになって、かえって議論への情熱は薄らいだのではないでしょう

か。
金 確かにその通りだけれども、例えば旅行に行っても宿屋に一緒に泊まらなくなって個室になったでしょう。暮らし向きの違いだと、私には感じられます。

阪上 僕が助手になったのは六六年ですが、当時は給料も安かったですね。だから、研究会の後の二次会は、面白い話が聞けるうえに、ただ酒が飲めて大変うれしかった（笑）。それに、助手仲間が安い酒場でしょっちゅう呑んでくれて、わいわい騒いでましたね。七〇年代以降は、豊かになったのと、個人主義が強ま

ってきて、そういう風潮は少なくなってきたのではないでしうか。

横山 そうした変化というのは、日本だけではなく、世界的にも見られます。

籠谷 七五年くらいから今に至るまで連続する何かがあるように思えます。私は、その後退期に勉強をはじめたわけけれども。

大浦 その変化をできれば、ネガティブに捉えるのではなく、未来志向で考えたいですね。

武田 共同研究にふさわしいテーマが見つかったところで、そろそろ次の話題に。

〈大学変革の動きのなかで〉

武田 大学紛争というのは、人文研ではどうでした。

阪上 私はまったく中において（笑）、結構ホットでしたよ。共同研究の活性化をはかるためにどうすればよいか、何度も助手会を開いて侃々諤々の議論をしました。

富谷 でも、学生がいけないということで、少し状況は違うでしょう。学生がいけないことで、人文は傍観者のな立場だった。

大浦 その点、人文では助手の存在が大きいですね。
阪上 以前には研究者でなく事務助手とされている

助手が何人かおられて、その処遇の改善が助手会の目標の一つでした。

吉川 助手の採用が研究班主体ではなくなり、各部で行うようになって、大きく変わったのですね。

阪上 実は、この所報『人文』も、紛争の頃の助手会の運動と関係があります。直接に要求したわけではないのですが、助手の発言権を求める動きのなかで、これです所のコミュニケーションをはかろうとした。研究者会議の制度も同じで、共同研究の形骸化を打破しようとする試みでした。

富谷 今やその二つとも、形を変えて別の方向に行ってしまったっている。助手代表も所員会の単なる記録係だし。

阪上 そういえば、透明度を増すために企画委員会も傍聴させよと助手会で要求したら、福永光司先生が、君達はその家の台所まで覗きたいのかとおっしゃった(笑)。いずれにせよそのころの助手は元気でした。

横山 確かに鼻息が荒くて、廊下も大股でした。「ワシら人文やくざや」という人もいたなあ(笑)。

武田 若手研究者の養成がうまく機能していた時代であったように思います。文学部でも大学院化によって助手自体がいなくなつて、いろいろな問題が出てきました。

吉川 これまでの二〇年間を振り返ると、学内では教養部が総合人間学部と人間環境学研究科に改編されたこと、そして文学部の大学院重点化、学外では日文科の創設が、人文研に関係の深い出来事のように思われます。

阪上 日文科の創設には人文研の先生方が多数関係されただけでなく、共同研究を主な研究活動とする人文科学系の研究所が設立されたという点でも、人文研にかかわりが深いですね。共同研究はもはや人文研の特許ではなくなり、その「共同性」ということをあらためて考えなければならぬ時期に來ていると思います。

武田 共同研究のことについては、後でまとめて議論したいと思います。大学院問題に研究所が直接にかかわるようになったのは、何時の頃ですか。

吉川 教養部の改組の動きのなかで、新しくできる大学院に人文研も協力講座として参加してほしいという要請があったのが、始まりですね。結果として谷泰さんが人間環境学研究科に参加されることになったですが、消極的な意見も多かったように思います。

阪上 私が所長になる少し前に、文学部の大学院重点化が具体的になったのですが、文学部の先生方と協力講座としての参加をめぐつて幾度も協議しました。

所内の委員会での議論では、人文研の独立性をどのようにして保証するかという点と、単に文学部の要請への対応だけでなく、研究所の改組を考えるとということが問題になりました。結局、文学部長と研究所長のあいだで申し合わせを取り交わして、確か七部門が協力講座として文学研究科に参加することになりました。

大浦 私もその委員の一人でしたが、大学院化は確たるフィロソフィーがあつてなされたようには思えません。どこそこの大学がやるからだとか、予算が増えるからだとかいう議論ばかりが先行して。あとは技術論ですね。

富谷 私も同感です。何のために大学院生を増やさなければならぬのかもわからない。

金 大学というところは、大きく分けて三つある。学部、教養部、研究所。私はこの三つすべてにいたことがあつてよくわかるんだけれども、それぞれの教官に不満がある。教育と研究の間においてね。研究所というところは、教育と分離しています、でも学生を持ちたいという欲求



を強く持っている人もいる。しかし、どこでも無い物ねだりであつて、そこに大きな矛盾がある。それが日本の大学改革の根本になっているから、そこを考えないといけない。

横山 若手の教育ということでは、留学生のこともある。指導にかなりエネルギーを使うし、こういう人たちに学位が出せればという気持ちになることもある。人文というのは、いろんなことをやりながら、制度の改革とは関係なしにきている。大部門的な運営などは、だいたい前から実験的なことをやってきた。とつくにやっていたから、あとから組織変革を勧められても必要性を感じなかった。しかし、いま考えれば、国全体の流れにうまくギアをはめる工夫は、うまくなかった。

富谷 研究所はこの体制で行きたいというのが、みんなの根本にあつたのではないですか。思い出すのは、助手代表の時、八〇年前後のことですが、研究所は小さくまとまっていけばいい、いらんことは考えるな、と所員会である教授が発言されたことをまだ覚えています。

阪上 予算を増やすためにしたくないことをするよりも、清く貧しいほうがいいよ、という意見が強かった。

小山 でも、この二〇年間を見ると、新しい部門が

いくつかできてますね。

阪上 八〇年代はまだ単独で部門増が認められた時代です。八〇年代はじめにできた比較文化の外国人客員部門は、当初は人探しに苦労したり、難しいことがありましたが、しばらくして喜んで来られる人が増えて、うまく機能するようになった。成功だったと言えるでしょう。でも、せっかくできた人的なネットワークをもう少し活用しないといけませんね。

横山 その頃招いた人々の教え子がやって来るようになった。来られた学者が、どんな風に学問しているかを実際に目撃することは、すぐに結果は出ないけれども、デジタル情報では得られないものがある。

阪上 九〇年代に入ると、単発の部門ではダメ、スクラップ アンド ビルドでなきゃ認めないとなって、改組問題を正面から考えないわけにはいかなかった。**武田** 吉川先生は、その頃に所長になって、苦労されたんでしょう。

吉川 僕は何であんな時に所長になったのか、いまでもわからない（笑）。吉川にやらせておけば、何もやらんだろうということですかね。

阪上 九三年に吉川さんの後を引き継いだ僕の時になると、部門増についても研究所全体の改組が強く求められます。八〇年代後半だったと思いますが、学術

審議会が大学付置の研究所を、早急に全面的改組の必要なもの、部分的改組の必要なものなどにランクづけしたのですが、人文研は、幸か不幸か、問題のない研究所のランクに入っており、その結果、多くの研究所が経験した改組の波をかぶらなかつた。所長になって文部省に挨拶に行った時に、研究機関課の人が、人文さんも改組をお考えですか、もう少し前なら簡単だったのですがね、と言われたのが大変印象に残っています。人文研が改組に真剣に取り組んでいるということを感じてもらえるようになるまで、かなり時間がかかりました。その時には、七部門に改編する案を概算要求に出したのですが、当時は独立研究科の創設が京大全体の主要項目だったので、実現に至らなかつた。それが、本年度の改組案の原型になっているわけです。**武田** 予算面では、経常の校費の伸びは微々たるもので、科学研究費などの競争的経費でまかなえるということになったんでしょう。そうしたプロジェクト中心主義にも、問題点はありますか。

吉川 人文科学の研究にはプロジェクトでやるべきものも多いですが、それには馴染まない古典の会読や文献資料の収集が重い比重を占めていることは確かです。理工系モデルを想定したものを人文科学系に機械的に適用すると大変まずいことになるように思われま



す。

大浦 ただ、とにかく改組プランを出さなくてはいけないという目前の要請に振り回されていて、研究所のあり方をこう変えたいという内的な欲求があまり感じられなかったように思われます。

横山 私の内的要求は冷遇されてきたなあ(笑)。

プランづくりの段階であれこれと雑談せなあかん。それには、東一条と北白川の距離も縮めないと。みんなが住める大きい家を一、二軒建てて週のうち四日くらいそこで暮らすといい。

武田 改修した分館が文化財に指定されたりすると、人文研の移転問題が急浮上しそうですね(笑)。

阪上 北白川の建物の改修について言うと、事務局長が熱意をもって当たられて、改修としては破格の予算を取ってくれました。施設部も元の状態を尊重して大変熱心に取り組んでいただきました。おかげで漏水や書庫の問題はかなり改善したと思います。

富谷 耐震構造を調査した際に、床板に用いられている材木等はとても分厚く、上質なもので、今ではと

うてい入手できないものだから、張り替えなくても十分使えるとのことでした。分館が建設された時の情熱のようなものが伝わってくるように感じられます。それから、地下室に藤枝晃先生のカバンや段ボールがいっぱい見つかって、水曜会の話題になりました(笑)。

〈共同研究のタイプ分け〉

籠谷 共同研究というのは、どういうスタイルが有効なのか、と考えることがあります。

大浦 共同研究形式とディシプリンあるいはテーマ設定とのあいだの相性ということを僕は考えます。僕の印象では、例えば歴史研究というのは比較的に相性がいまいに思われるのですが……。

阪上 私のこれまでの経験では、成果のまとまりやすい共同研究というのは、ある個人か、あるテキストを取り上げたもので、おのずと収斂点が一つになる。ある時代の研究というのは、拡散しやすくて、案外難しい。抽象的命題をテーマにすると、さらに難しくなる。でも、現在の共同研究は、抽象的命題のものを取り上げるのが一つの道ではないでしょうか。

横山 テーマが決まるまでに、一年くらいいしかないでしょう。でも、そこに時間をかけて、所内の多くの人に応用問題になるようなテーマを見つけた作業を

しないかね。

吉川 また紛争の頃の話題で恐縮なんですが、共同研究のランク付けをABCでしていたことがあったそうですね。テキスト読みは、Cランクだったとか。

阪上 あれはランクづけではなくて、タイプ分けでしょう。東方部の共同研究で、これまでの蓄積もあって、学際的研究ではないけれども、本読みの伝統を生かそうとしたものではなかったのかなあ。

富谷 その三つというのは、討論形式のもの、本読み、そして索引作りだったはずです。索引作りは長く続け、作業的なものだから批判が出たと聞いています。

吉川 僕は、『真話』を読んだのは成功だったと思う。いろんな専門家が寄り集まって読まないと思いが深まらないテキストだった。

武田 科学史研究班で読んでいるテキストもそうです。

大浦 会読形式というのは、僕も大切だと思います。ただ、僕には経験がないので想像でしか言えませんが、会読というのはあくまで方法であって、重要なのはその向こうにあるゴールでしょう。

富谷 東方部で行っているテキストの解説は、いくつかの解釈のパターンを探りながら、いかに正確に読

むかというところにゴールがある。

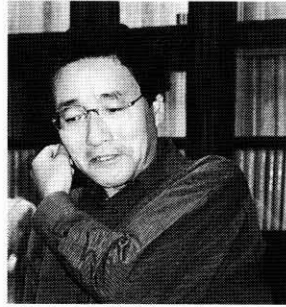
吉川 訳注を作るというのが、最終目的地ですね。

大浦 共同研究のなかには、目指すゴールはないが、模索しながら作り上げていくようなものがあったかもしれないでしょうか。

阪上 桑原先生の時代なら、例えばルソーを読むのに、それぞれの人が陣地を持っていて、一つの対象をいろんな角度から攻めるというのが中心だった。けれども、これから要求されるのは、そういう学際的な研究だけではなくて、共同研究から新しいディシプリンが出てくるようなものを目指す必要があるのではないか。

籠谷 一九七〇年代の人文というのは、反マルクス主義を掲げてがんばっていたイメージがあった。しかし、ターゲットとしてのマルクス主義が弱体化し、人文のメッセージも弱くなってしまうところがあるように思う。もはや陣地を守って勝負するという戦略が失われているのかもしれない。

横山 生態学の人たちは、一億年から百年ほどまでの複数の時間単位で、しかも人間を含む生物群の種間関係を視野に入れて、人間の歴史を語ろうとしている。私にはそれほど違和感はなく、自然科学と人文学が共同して、生命のかたちを語り直すどのような方法があ



るのかというところで、両者が歩み寄れると思う。世界の何処でそれが可能なかと考えた時に、人文もそれができる場所の数少ない一つであるように思う。

阪上 横山さんが自

然科学と人文科学の対話を試みているのも、その二つから何か別のものを生み出そうとする狙いがあるんじゃない。自然科学も、単純な因果関係を追究するだけでは行き詰まってきて、複雑系とかが出てきたように、人文科学と接近しようとしている。以前の社会科学は、自然科学をモデルとし、自然科学化をめざしていたけれども、そうではなくなりつつある。だから、ゴールはわからないが、共同で研究するなかで違う見方を生み出す時代になっていくのだらうと思いますね。

金 それは確かだが、共同研究について言えば、そうでない研究会もあっていいのではないか。さつき富谷さんが言ったように、正確に読むということを目的にしたもの、あるいは何を言っているのかわからないテキストの解説もあっていいように思う。共同研究というのは、要するに、その時点でやりたい人がやりた

いことをやる、というものであるべきだ。

横山 意味の分からないものを解釈するというのは、無駄も多いが、ヒントも多い。その蓄積は大きな力になる。「本読み」と簡単に言ってしまうが、その精進は大切です。何かにすぐに役立てるためにやってきたわけではないでしょう。人文が数少ない場所になりうると言ったのも、古典研究を地道にやってきたからだ。それから、言葉の問題ということで言えば、読みやすい文体で書くという工夫も忘れてはいけないね。特定の専門家しかわからないという論文はいただけない。人文でやらんといかんことは、古い言葉を集めることと今の言葉を磨くということではないですか。

武田 さつき思想の衰退とか、フィロソフィーの欠如とかが話題になったけれども、現代の先端科学には言語力がない。学問にとってそれはおぞましいことであり、人文科学がサイエンスにおいて何かやれるとすれば、そこにポイントがあるでしょう。

横山 理学研究科や医学研究科からも期待を寄せられていますよ。

富谷 さつきの三つのタイプで索引作りはダメと批判的に受け取られてきた時代があった。期間が長い、徒弟制になる、みんなが作業員になるという弊害があった。ところが、最近の研究者会議で、興味深いと思



って聞いていたことがありました。藤井さんが始められたインド学の共同研究は、これは作業だと表明されておられたことです。かつての東大部の一種の資料集め、索引作りに再

び戻ろうとする。まさに、循環ですよ、これは。

横山 そうそう、循環しているうちに、日・東・西の三つの部が寄り合って、縄になることもある。

大浦 テーマも手法も違ったいろんな研究会があつていいように思います。多様性を豊かさとして認めてほしいですね。

吉川 やられるのは、今でも自由ですよ。

大浦 僕には、今の人文の雰囲気がいいとは思えません。共同研究方式の硬直化とか、領域の違う専門家のあいだの対話がなかなか成り立ちにくいこととか、理由はいろいろあるでしょうが、いずれにしても研究者同士の生き生きとした関係が見られるとは思われません。研究会を本当に「楽しんで」いるようにも見えないし。

金 形だけで研究会をやっているからでしょう。

横山 これ面白いからやろうというのは、大切にしたいですね。

籠谷 確かに横山さんの研究班は、銭湯まで一緒に楽しんでおられるようにみえる（笑）。

横山 ちょっとつけ加えると、退屈することも大事ですよ。何でもこんなことをやっているのかという感じをみんなが共有すると、新しいことがポツポツ出てくる。

大浦 退屈の効用ですか、横山流パラドクスですね。やっている研究会がいったい何の意味があるのかという議論もできるような共同研究でありたいですね。

吉川 東大部の研究ということで言えば、本読みの研究会は、是非とも続けていってもらいたいものです。それに、仲良く楽しくやってください（笑）。

〈ポスト共同研究の試み〉

小山 過去の歴史というのは、ある意味では、我々を縛っているし、いろんなしがらみにもなっている。でも、たまに振り返ってみてもいいなあと思うのは、現在のスタイルがいつも絶対であったわけではないことがわかることです。人文のアイデンティティーは、ほんとうに現在行われているような共同研究にだけあったのかと言えば、海外調査を盛んにやっていた時期

もあるし、けっこう流動的だったようにも思います。

富谷 中国史研究の場合で言いますと、これまで以上に中国人研究者との競争が激化してくると、研究対象となるモノを直接に持たない我々が、じかに扱える本国に対抗して何をすべきかが問われてくる。科学技術史や考古学でも、状況は同じではないかと思いますが、これまでは優勢に研究をリードしてきたけれども、やがて比較文化史でしか生きていけなくなるかもしれない。外国史研究がかかえる苦悩に、中国史もいよいよ陥ろうとしているわけです。そこで、これまでの遺産を継承するだけではなくて、新たなフィールドワークに着手することはもちろん不可欠になってくるように思います。

武田 そうした学問状況の変化に、共同研究の枠組みも対応させる必要があるということですね。

富谷 その通りです。共同研究の参加メンバーも、外国人にまで広めていかないとけなくなるように感じています。それには、これまでとは違って、非定期なものを考えないわけにはいかなくなる。我々の課題としては、そうしたプロジェクトの拠点として、どれだけの求心力を発揮できるか、というところにあるのではないのでしょうか。

大浦 共同研究でなくてはならないということは、

今や再考してもいい時期に来ているのではないかと僕は思います。研究者が目されるのはやはり個人研究であり、そういう時代なら個人研究をしつかりやるうよというスタンスも忘れてはいけません。

金 基本的には大浦さんに賛成なんだけれども、こは個人研究で満足できない、広く外の意見を聞いてみたい人が来ているはずなんです。個人研究で立派な業績をあげるだけいいなら、ここにいない必要はないでしょう。

籠谷 僕は、是非ともインパクトのある共同研究を将来立ち上げたいので、班長の方にいると尋ねたりしていますが、共同研究というのは、個人研究の延長で組織してはいけないと言われたことがあります。

富谷 共同研究と個人研究は、チームプレーと個人成績で、そんなに矛盾するものでなく、相補的な関係にあるべきだ。一人はみんなのためという形を設定して、そこからチームワークを生み出し、同時に個々の班員の個人研究を伸ばすというのが、班長の力量ではないだろうか。

金 そもそも研究というのは、どうやってもいいし、自分のためにやるものだと思っている。個人のためにやってはいけないというのはちょっとおかしい。ここに来て五年間、研究者会議なんかで感じていることは、

成果を出さないといけない共同研究がいかに大変かというところを感じる。でも、本来は、共同研究はいろいろな人が集まることで、自分だけではできないことができる、自分の世界も広がる、そうした楽しいものであるはずだ。それなのに、伝統の維持というか、共同研究を成功させるためにやるなんて、ナンセンスでしょう。自分の研究と共同研究が乖離して、そんなに面白くなって大変なら、やめればいいと思う。方式だってそうでしょう。人文式共同研究があつて、それに従つてやらなくても、みんな違つていい。そこに、個々のパーソナリティが発揮されるべきでしょう。

武田 人文方式なんかないのに、あるかのように自己規制してしまうのが一番怖い。

横山 京都の町には、人文研に想いのある人が多い。それもあるイベントをやるためにきわめて具体的な事柄について知識を求められることがある一方で、逆に町には色の種類なら二千も見分けられる人がいたりする。今はうまく繋がっていない。もう少し、町の人同士き合うと、いろんな楽しいことがある。

武田 人と繋がっていくためには、アウトプットの仕方にも工夫がいるように思います。

富谷 近年、共同研究の成果をまとめた出版物の経費が極端に少なくなつてきている。これは何とかして

もらいたいですね。出口のところであつてしまつたまま、共同研究の活性化とか言つてもうまくいくはずがない。

吉川 この出版物は、古本屋でとんでもない非常識な値段がつく。それに大いに疑問を感じたから、僕は共同研究の成果をよその出版社から出してきた。それなら、定価がつくから、少し高くても、買いたい人が手を出せないようなことにはならないでしょう。

武田 この共同研究には、聞き手、読み手がいなということがありますかね。

横山 誰に語りかけるかという、後世の人を待つのみ、というタイプもあるかもしれない。

大浦 共同研究の「共同性」とは何かを考えると、結局は研究者相互の関係の「身体性」に行き着くと思うんです。理念的な関係、つまり情報交換だけなら個人でもできる。でも、肉声で語り合つたり、まなざしを交換するためには、人と会わなければならない。共同研究のイベント性というのもそこにあると思うんです。

金 この前の会議でインターネットでやるという人もいたけれども、アレもいいと思う。

大浦 共同研究の落としどころとして、論文集だけがあるのではなく、一回一回の会合や議論を一つのイ



ベントとして、いわば「事件」としてとらえるという見方もあるように思います。

小山 共同研究の成果を、活字になった論文集だけでは考えないで、プロセスそのもので、

も評価するわけですね。ただし、対外的に認めてもらえるかという、難しいところがあるのではないのでしょうか。

富谷 単なるサロンになって、言い放しでいいのかという問題はあるように思います。私は今、中国の辺境に出土した木簡の解読を試みる共同研究を開いていますが、きちんとした成果を出すには、少数精鋭にならないを得ないところもあります。専門性を高いレベルで保とうとすると、班員に無責任な発言は慎むことを要求しないわけにいかない。でも、そうした緊張感では大事にしたいですね。それに、共同研究から終わって出版物にまとめるまでの過程も、相当なエネルギーを費やしますが、だから評価されるものが出てくるように感じられます。その最終作業が楽しくて仕方がないなら、誰も文句はないのでしょうか（笑）。

阪上 面白くやるというのは、共同研究の基本的なモチベーションですが、同時に税金で成り立っている機関ですから、タックスペイヤーに対する責任を考えないといけない。今日、この点があまりに短期的・短絡的に強調されているのは、大いに問題ですが。

金 同好会ではないのだから、同業者から見ても認めてもらえるようにするものを出す必要もある。それは、楽しくやることと別に矛盾するわけではない。

阪上 そこが無責任になるとね、困ったことが生じる。義務を果たさないなら、民間でやれとかね、いろいろややこしくなる。

吉川 それと引き替えに、大学院を持って、教育にも乗り出さないといけない、というすり替えが起こっても問題です。

阪上 そうしたすり替えが起こっているのが現状でしょう。でも、別の形で社会的貢献を積極的に提起しないといけない。

金 我々が還元しようするのは、必ずしも今の社会ではなく、次の社会でしょう。私が以前にいた大学では、まず企業にアンケートを取って、学生に何を希望するかを聞いたうえで、授業の方法を立てるというところだった。ここは、そういう所ではないし、それでかえって後で役に立つこともあるのではないでしょう

か。

武田 インターネットでフリーに流すということも、考えてもいい。大浦さんのポルノグラフィー研究班なら、肉声と映像を添付する（笑）。古本屋の値段の高さで聞うてきた外部評価を、無料で流した場合のアクセス数でそれを行ってみれば、人文研の存在価値もはつきりするかもしれない。文献センターを、研究情報の発信基地に活用するというのは、どうでしょう。

阪上 研究所における文献センターの位置づけというの、今後の大きな課題でしょう。外部評価ということで言えば、数年前に外国人招聘教授にアンケートを行いました、客員で来られた方々と交流を続ける点でなかなかよかった。時々やって、もう一度ご縁を結び直すこともいいのではないですか。

横山 センターの活動がうまくいくかどうかは、そういう人々が世界各地の拠点となつてこそ機能する。

小山 研究所は、外から何をやっているか、見えにくいところですね。だから、成果の出し方を工夫する必要がある。出版物がばらばらであるのを、何かにまとめて出すのもいいでしょう。インターネットの発信もこれからです。でも、どこからでもアクセスできるから、これには、京都でなければならぬというローカリティーがない。だから、三つ目として、夏期講座

というの、意外と大事であるかもしれない。共同研究や個人研究の成果を、地元の方々に開く活動をするのも、意義のあることでしょう。

阪上 人文研叢書というのを、企画しようという動きはある。夏期講座、開所記念講演も、京大の他のものとまとめて出すというのでもいいかもしれない。

金 でも、叢書の出版や市民向けの講座というのは、どの機関や大学でもやっていることではないでしょうか。だから、あまり効果はないかもしれない。

横山 人文研は、どういう組織であるのかを考え直す時期に来ている。万一、最適の研究環境であるというならば、自分たちだけで独占するのではなく、メンバーを固定しないで交替させていく必要がある。しかも、文系だけに偏るのではなくてね。

金 学部の人、教育することを大変というけれども、それによつて研究面でのメリットを得ているところもあるはず。だから、教育しないことのロスを考えれば、たとえば文学部と三年くらいで入れ替えをしてもいい。まったく知らない初級の人に話をするというのは、大変だけれども、ためになることが多い。

大浦 私は、コレージュ・ド・フランス方式というのは提唱したい。年一〇回程度、一般向けに授業をするのです。誰が聴きに来てもいいかわりに、単位など

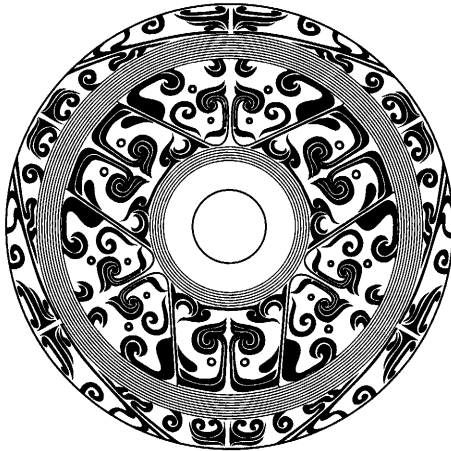
は出さない。共同研究をやるか、これをやるか、それを所員の最低のノルマとするのです。もちろん両方やる人がいてもいい。どうでしょう。

阪上 今の大学制度ではやりにくいところがあるが、今、大学は大きな変化を迫られていますから、そのなかでうまくやれば、何かができる可能性はありますね。

小山 共同研究を母体としてもできるのではないのでしょうか。

武田 まもなく訪れる二一世紀には、共同研究が多様化、活性化し、さらにポスト共同研究の試みもなされそうで、大いに期待できるのではないかと思います。今日のところは、このあたりで。

(一九九九年九月九日 本館応接室にて)



(資料紹介)

小島祐馬旧蔵「対支文化事業」関係文書

解説

松田 清

京都大学人文科学研究所はその淵源である東方文化学院京都研究所の創立(一九二九年)から数えて七〇周年を迎えた。東方文化学院は「庚子賠款」すなわち、一九〇〇(明治三三)年の義和団事件によって日本が得た賠償金を主な財源とする「対支文化事業特別会計」によってまかなわれる外務省管轄の研究所であった。もともと、「対支文化事業」の実施は一九二三(大正一二)年に特別会計法の公布にともなうて設置された外務大臣の諮問機関である対支文化事業調査会が、北京に人文科学研究所と図書館、上海に自然科学研究所を設立することを翌年に決議したことに始まる。事業推進のために一九二五年日中合同の「東方文化事業総委員会」が設けられた。北京人文科学研究所は一

九二七(昭和二)年に設立されたものの、翌年、山東出兵によって起きた済南事変に抗議して総委員会の中国側委員が総辞職するに及んで、対支文化事業調査会は国内に研究所を新設することを決めた。こうして東京研究所と京都研究所からなる東方文化学院が成立した。

東方文化学院京都研究所は一九三八年に東京研究所とたもとを分かち、東方文化研究所として独立したが、一九四一年外務省から興亜院に、翌年には大東亜省に移管された。東方文化研究所は実質的には東方文化学院時代と変わらず、可能な限り時局的要請を回避して、中国古典文化の純粹研究という理念を追究したが、敗戦後の困窮に苦しむ中、一九四九年に「世界文化に関する人文科学の総合研究」を目的にかかげて発足した京都大学人文科学研究所に吸収された。この研究所の前身は一九三九年、東亜新秩序建設という時局的要請

のもとに付置研究所として設置された京都帝国大学人文科学研究所である。所長は文学部長小島祐馬おじまつまが兼務し、一九四一年停年退職した小島に代わって高坂正顕が第二代所長となっている。

七〇周年を迎えたこの研究所が二一世紀におけるさらなる発展をめざすとき、戦前戦中二〇年の理念と戦後五〇年の理念を如何にして統合し継承するかがあらためて問われているように思う。

ここに紹介する高知大学附属図書館小島文庫所蔵「対支文化事業」関係文書四点は一九八一年夏、小島祐馬旧蔵書を小島文庫として高知大学に設置すべく同附属図書館に搬入した際、筆者がご子息懋氏から小島文庫の一部に加える許可を得て搬出した文書類の中から、「毛詩正義」残簡（唐代写本か）とともに見つかったものである。一九七九年春、人文科学研究所五〇周年の年に筆者は西洋部助手から高知大学人文科学部に転任したが、そこで小島文庫設置準備に携わることができたのは不思議なめぐりあわせであった。その上、義和団事件賠償金をもとに構想された「対支文化事業」の理念の形成過程を知る貴重な文書に出会うとは正に奇縁であった。

一九二三年三月に「対支文化事業特別会計法」が公布されたあと、同年五月に上記「対支文化事業調査

会」が設置されたが、その有力委員であった文学部教授狩野直喜は小島祐馬の恩師であった。小島は同年八月第三高等学校講師から文学部助教授に就任している。調査会は上述のように、翌年に北京人文科学研究所と上海自然科学研究所の構想を結論として出したが、小島は「狩野先生の学風」と題する、一九四八年五月二二日の支那学会記念講演会における講演で当時を振り返り、恩師の学問観と「対支文化事業」構想との密接な関係を現場の人間として次のように語っている。

学問を手段に使つてはならないといふ先生の信念は、（中略）政治や外交の如き重大な問題に当面した場合にも同様に強く主張せられたのであります。大正の末年我が外務省で対支文化事業を計画しました時、京都大学の支那学関係の教官の間では大規模の文化研究所の設置を唱道し、大体に於いて其の説が認められたのであります。是より先き其の趣意書を私に作れといふことで、その材料として各教授の意見を銘々箇条書きにして出していたことがありました。その時狩野先生の出された書付が今も残っております（後略、私家版と思われる同講演録による）。

この「狩野先生の出された書付」こそ、今回紹介する小島文庫所蔵文書四点のうちの巻紙（甲）である。また小島が作成したという「趣意書」の自筆草稿は（乙）と思われる。招聘中国入学者の分野別リストと事業概要からなる巻紙（丙）、および事業の着手順序、研究部門（人文科学と自然科学）、事業の区別（經常と臨時）、経費、経費見積からなる四葉（丁）は、書き手が不明であるが、いずれも狩野の示した基本線に沿ったものである。狩野以外の教授が出したという箇条書きは所在不明である。小島は続けて、（甲）の冒頭二条および中国入学者の招聘と優遇を規定する条項を引用したのち、「学問を政治の手段から救ふ」という狩野の「異常な努力」の跡を回想する。

さうして研究所設置の場所は何処にするかといふ点については、或は内地に置くべしといふ説があり、或は関東州がよい、或は山東がよいといった意見も出ましたが、内地説を極力排してすべての機関を一括して北京に置くべしとする狩野先生の意見が採用せられたのであります。此の場合狩野先生の態度は、すべて学問を政治上外交上の手段に使ふことから護り抜かうといふ気魄に満ち満ちたものであります。山東出兵から支那側委員

の脱退となり、北京の研究所の事業が停頓を來した結果、小規模の研究所を内地に置くこととなつたのが、東方文化学院の東京京都兩研究所であります。初め京都で研究所の内地設置説を唱へたのは桑原（隲藏）先生唯だ一人でありましたが、此に至つて桑原先生の説が最も實際的であつたことを立證したことになります。研究所を内地に置くことになつてからも、その研究所が支那の古代文化を研究し保存し之を世界へ紹介するといふ目的は前の研究所の場合と變る所はありませんでした。さうして最初の間は大した故障もなく経過しましたが、支那事變が起ると共に軍部の壓力は此の方面へも延びて來まして、支那古代文化の研究など無用のことである、それよりも現在の對支政策に役立つ現代支那の研究をせよといふことを言ひ出し、外務省は折衷案を考へ、従来の研究はそのまま繼續して良いが、その外に現在の政策に役立つ新しい支那の研究を二三取入れるやうにとの希望がありました。東京は訳なくその希望を容れ、租界の研究や列強の支那投資の研究など四つばかり新研究題目を掲げましたが、京都ではそれを拒絶して当初の目的を貫徹しました。これは京都研究所の幹部の一致した意見ではありましたが、交

渉の局にあたる狩野先生に此点に就いて強い信念がなかつたならば、恐らく東京と同じ運命に置かれて居つたでありませう。学問を政治の手段から救ふことに於いて狩野先生の示された異常な努力は、誠に敬服に堪へないものがあります。

こうした京都の学風は軍部の圧力に屈した東京から、当時どのように見られていたか、ここで穿鑿する余裕はないが、上海自然科学研究所のことが氣に掛かり、フランス文学者後藤末雄の『芸術の支那・科学の支那』（一九四二年刊）を再読してみた。「中国自然科学史に関する文献調査」という名義で上海自然科学研究所長佐藤修三から招聘を受け、一九四一年夏に中国各地を歴訪した著者の学芸紀行である。案の定、上海自然科学研究所訪問記録の末尾で、後藤は婉曲ながらも日本の中国研究の現状を憂えていた。

北京の研究所では四庫全書から逸脱した文献を蒐集中だと聞いてゐる。東京と京都の支那文化研究所はどういふ成績を挙げてゐようか。相当な研究業績を示してゐることだらう。けれども僕は支那研究に就いて一つの意見を懷いてゐる。昔の（傍点引用者）支那研究と言へば、その主体は經

学であり、文学と史学とがその左右に陪席してゐた。實際、研究の範圍が狭かつたし、その研究も多くは内地研究で、文献から文献への研究であつた。（中略）東亞共栄圈の実現だとかいふ堂々たるスローガンを耳にするとき、邦人の支那研究が欧人の支那研究を唯一の頼にしてゐるやうでは誠に心細い。今後の支那学者は研究対象を拡大し、欧人の研究をも参照して、素晴らしい研究業績を発表すべきである。（中略）支那精神文化研究所が遠く内地に設立されてゐるのは何ういふ訳か、僕には想像がつかない。（中略）支那研究が言はば「やめ暮し」をしてゐては立派な業績を上げることは出来ない。それで僕は支那の自然科学研究は勿論のこと、精神科学研究も現地で行はれることが絶対に必要だと思ふ。（中略）とにかく上海自然科学研究所のそばに精神科学研究所を設けて、支那研究に「夫婦暮し」をさせなければ、今後の我が支那研究に対して、素晴らしい業績を期待することは残念ながら不可能だと信じてゐる。

中国研究に対する後藤の批判と展望は、上海自然科学研究所の素晴らしさに魅せられ、その自由な雰圍氣にさそわれて、積年の思いが噴出したもののように思

われる。この視点は、以下に鰯刻紹介する対支文化事業関係文書にあらわれた狩野の理念を現在の時点ととらえ返し、発展させていく上でも、参考になるだろう。鰯刻に当たっては、句読点を含め出来るだけ原文に忠実を心懸けたが、漢字は通行の書体に改め、適宜濁点を補った。抹消語句は〈 〉内に示し、判読不能の場合は〈 〉とした。「はコトに直した。〈 〉、〈 〉および〈 〉は原文に使用されている記号である。〈 〉内の細字双行は単行に改めた。甲乙丙丁などの文書記号は、私に付したものである。翻刻・写真掲載を許可していただいた高知大学附属図書館に謝意を表する。

(まつだ・きよし 総合人間学部教授)

一、古来、経籍に就き、楷威元
定本を依りて
二、古文に現存する書、其の出板
一字考索引等凡そ支
那、學術研究上極に必要
なるに、從來、研究せられ
編纂せられ、而、國人に
て、支那研究、便面と爲
るべし
Stein
Gundlach
Liang
Sellsch
Rockfelle
Institute
一、近頃、英獨佛米諸國、支
那に於て、セル例に倣ひ、時
探險隊、支那内地及び
塞外、派遣、搜索せ
前、研究材料

高知大学附属図書館小島文庫所蔵「対支文化事業」関係文書【甲】

【甲】

一、支那ニ於ケル文化施設ハ両国間ノ直接利益ヲ全ク顧慮セザルコト

（此ノ事業ニヨリテ）支那ノ排日的感情ヲ除去スル等ノ目的ヲ基礎トシテ此事業ヲ創メザルコト

一、此事業ハ支那数千年來ノ文化ヲ研究シ保存シ世界ヘ紹介スルヲ以テ目的トス

一、此事業ノ重ナルモノハ精神科学ニ於テハ支那ノ儒学、宗教（仏道）、歴史、地理、文学、言語、芸術、土俗、遺物等、自然科学ニ於テハ天文、動

植、鉱物、藥物、地質、氣象等ノ研究ヲナスコト

一、古來ノ経籍ニ就キ權威アル定本ヲ作ルコト

一、日支ニ現存スル古典ノ蒐集及（び）出版

一、字書索引等凡ソ支那ノ學術研究上極メテ必要ニシテ從來閑却サレタル編纂出版ヲナシ両國人ヲシテ支那研究ノ便宜ヲ与フルコト

一、近時英独仏米一校注：Stein Grindweder [sic] Lecog etc Pelliot Rockfeller Institute との協書

きあり」諸国ガ支那ニ於テナセル例ニ倣ヒ時々探險隊ヲ支那内地及び塞外ヘ派遣シ千歳埋没セル前

（一） 掲研究之材料ノ蒐集ヲナスコト

此事業ハ我国ノ各種専門家ヲ集メテ之ヲナサシムルハ言フヲ待タザレドモ、同時ニ支那ノ学者ヲ聘シ十分

優待ヲナシ此事業ノ完成ヲ襄助セシムベシ

支那ノ学者ヲ聘シ優遇ヲナスコトハ此事業其物ニ必要（スル為）ナルニヨル。《学者》彼等ノ歛心ヲ買ヒヨリテ排日的感情ヲ融和セムトイフ如キ陋劣ナル動機ヲ交ヘザルコト

康熙乾隆諸帝ガ自ラ学ヲ好ミタル結果清朝ニ学者輩出シ其業績ハ（今日マデ）支那ノ學術上不朽ノモノタリ世或ハ二帝ノ学者ヲ優待セシハ漢人懷柔ノ策ニ出タレトイヘド此レハ全ク二帝ノ人トナリヲ知ラザル言ナリ。此舉ヲナスニ当リ我国ノ態度ハ公明正大何等ノ私心ナク康熙二帝ノ心ヲ以テ心トナスコト

支那（ノ）ニ於ケル文化施設事業ニツキテハ世或ハ我国ニ於ケル留学生ノ学資補（助）給、会館ノ設立、支那ニ於ケル学校病院ノ建設（ナド）等ヲ提倡スルモノアリ此レモ（極メテ）必要タルヲ失ハザレドモ此等ノ事業ニヨリ英米ト競争スルコトハ極メテ不利ナリソレヨリモ彼ノ短所ニテ我ノ長所タル前掲ノ事業ニ主力ヲ集中スルコト利益ナリ莊子ニ無用ノ用トイフ事アリ当局者此点ニ着眼翫味サレムコトヲ望ム

〔乙〕

〈庚子賠款ヲ以テ〉对支〈那ニ於ケル〉文化〈施設ニ宛ツル〉事業ニ関ス特別會計法案ハ已ニ貴衆兩院ノ協賛ヲ經、其実行ヲ見ル亦將ニ近ニアラムトス（斯舉ノ及〈一〉ボス所、以テ帝國ノ信義ヲ隣邦ニ明ニスルニ足リ欧米諸國亦我真意ノアル所ヲ諒トシ從來彼等ガ我ニ対シテ懷抱セル疑團ヲ氷釈スルモノナシトスベカラザルナリ）支那ニ於ケル文化施設〈一〉トハ其指ス所果シテ何物ゾ、世ノ論議スルモノ或ハ謂フ宜シク以テ留日學生ノ學資ニ〈宛〉充ツベシ宜シク以テ會館ヲ〈一〉大学所在地ニ〈建〉設ケテ〈以〉彼等ノ研學ニ便ニスベシ曰ク學校病院ヲ支那各地ニ建テ教育濟生ノ事業ヲ努ムベシト〈言フ〉言フ所理ナキニアラズ然レドモ試〈ミ〉ニ思ヘ支那四万万人ノ一小部分ナル留學生ノ便宜ヲ計リ一小部分ノ支那人ニ対シ教育濟生ノ事業ヲナスコト果シテ文化施設ノ目的ヲ遺憾ナク發揮セリトイウベキカ況ンヤ〈其ノ〉此ノ如キ事業ヲナスモノ米國ノ已ニ我ヨリ先ナルモノアリ資〈一〉力ノ〈大〉鉅、規模ノ宏、我固ヨリ〈一〉遽カニ彼ニ比スベカラズ若シ同一ノ事業ヲ以テ彼レト角逐センカ徒ニ支那人ノ輕侮ヲ招クノミナラズ米國人士之ヲ見テ亦將ニ我ノ能ク為スナキヲ笑ハム生等竊ニ思フ此次ノ事タル宜シク我國ノ千有余年來支那ニ対スル文化關係ニ鑑

ミ又我ガ長處〈一〉那邊ニアルヲ顧ミ爰ニ文化施設ニツキ永遠ノ事業ヲ創メザルベカラズ「然而シテ此舉タル兩國間ノ直接利益ヲ全ク顧慮セザルコトナリ若夫レ此舉ニヨリ現時兩國間ニ存在セル惡感情ヲ一掃セントスルガ如キ乃チ功利ノ見ニシテ生等ノ取ラザル所ナリ」〈生等思フ〉支那ノ文化ハ其淵源四千余年ノ昔ニアリテ之レヲ古代ノ埃及希臘羅馬印度諸國ニ比シ決シテ遜色アルヲ見ズ然ルニ今や時運變遷ノ際、光輝アル旧文化ヲ漸ク衰頽ニ掃セント欲ス故ニ曰ク宜シク今ニ及ビ之レヲ保存シ又之レヲ研究シテ〈遍ク世界ニ紹介シ〉其価値ヲ遍ク世界ニ發表スベシ是レ實ニ我國人ノ使命ニシテ、支那ニ於ケル文化施設未ダ此レヨリ貴ク且大ナルモノアラザルナリ。

支那ノ文化ヲ保存シ且之ヲ研究スルハ何如ナル方法〈一〉ニ據ルベキカ曰ク宜シクシ支那文化ノ研究所ヲ北京若クハ彼ノ通邑大都ニ設ケ我國各種ノ専門家ヲ以テ之レニ當ラシメ又支那〈及ビ外〉ノ學者ヲ招聘シテ共此目的ヲ達スルヲ期スベシ而シテ支那文化ノ性質、〈甚〉其範圍極メテ広キ以テ仮リニ大別シテ人文科学自然科学ノ二トシ人文科学ニ於テハ儒學諸子學、宗教（仏敎道教等）歴史地理文學言語美術、工藝、考古學（土俗人類學亦之ニ附ス）等ヲ含ミ自然科学ニ於テハ動物、植物、地質鉱物、医〈學〉葉。天文曆〈數〉

【丙】

經學

漢學

古文學派

王國維 江瀚
曹元弼 ○章門

今文學派

不分古今文派

宋學

程朱學派

陸王學派

小學

羅振玉
王國維

諸子學

儒家

道家

墨家

名家

雜家

史學

支那史

政治史

法制史

掌故

柯劭忞
董康
楊鍾羲

《孫德謙》汪榮寶
章炳麟門派
胡適
同
葉德輝門派

經濟史

文化史

朔方民族史

南海民族史

西域史

東西關係史

金石學 附目錄學

俗學 附人種學

考古學

文藝

文藝

古典文學

古文 駢文 鄭孝胥
詩賦 詞余 陳三立

制芸 陳衍

沈尹默

沈兼士

俗文學 小說 戲曲

王國維
胡適

言語學

造形美術

音樂

宗教

仏教

楊文會門派

胡適
陳毅 屠寄
陳垣

羅振玉 張爾田
傅增湘 孫德謙

羅振玉

道教

天文曆算

地理

本草 附古代化学

医学

熊会貞
日人 杜聰明

事業概要

一文化研究資料ノ蒐集保存

内閣旧藏ノ档案類

現ニ其一部ハ北京大学ニ在リ 一部ハ羅振玉氏

ノ庫書樓ニ在リ

清朝実録、聖訓、玉牒ノ保存

清史館保存ノ史料

藏蒙滿文仏經板

殿板各種

四庫全書補遺（一）ノ蒐集

四庫全書統輯ノ蒐集

一文化研究資料ノ複製出版

四庫全書ノ出版

四庫全書補遺及統輯ノ出版

考古学美術資料ノ出版

一辞書及索引ノ編纂及出版

《辞》字典

人名字書

地名字書

百科辞典

十三經索引

廿五史索引

先秦漢魏諸子索引

一學術的探検《概要》

殷墟ノ発掘調査

洛陽地方ノ考古学的調査

長安地方ノ考古学的調査

歸化城地方ノ考古学的調査

滿洲地方ノ考古学的調査

甘肅、新疆地方ノ考古学的調査

一研究報告ノ出版

【丁イ】

事業（着手ノ順序ヲ示ス）

第一 古書遺物其他研究材料ノ蒐集保存

第二 〈前掲〉研究材料ノ出版

第三 字書索引類ノ編纂出版

第四 後二掲ゲル各部門ニ属スル研究及ビ発表

第五 支那内地及ビ塞外ニ於ケル學術探險及ビ報告

研究部門

人文科学

儒学諸子学

宗教（仏道等）

歴史

地理

文学

言語

美術工芸

考古学（土俗）

（人類学）
土俗学

自然科学

動物

植物

地質鉱物

医薬

天文曆数

【丁ロ】

事業（経常）

一支那文化研究所ヲ支那国内ノ一地ニ設ケ支那固有ノ

人文科学並ニ支那ノ自然界ヲ対象トスル自然科学

ヲ研究ス

支那ノ自然科学（ハ）ノ研究ハ其ノ人文科学ノ研

究ト離ルベカラザル關係ヲ有スルヲ以テ両者ノ研

究所ハ之ヲ遠隔ノ地ニ分置セズシテ必ズ同一場所

ニ併置セザルベカラズ

一図書館博物館ヲ設ケ支那文化ノ研究資料タル遺物標

本圖書等ヲ蒐集保存スルコト

一編纂出版 支那文化研究ニ必要ナル圖書ノ編纂出版、

研究報告ノ出版、支那文化研究上有益ナル著述ニ

シテ未ダ刊行セラレザル者及ビ既ニ刊行セラル、

モ今日多ク通行セザルモノ、出版、遺物標本ノ写

真版出版等

一學術探検

一研究員養成 高等学校大学ノ学生ニシテ支那文化研

究ヲ希望スルモノニ給費シ大学ヲ卒業セルモノヲ

支那ニ留学セシムル等（一）ノ事ヲ為シ其中ノ優

秀ナルモノヲ選ンデ本研究所ノ研究員ト為ス

（備考）

〔以上ニ要スル人員〕所長一人、研究員（高等官級）十二人、研究員及技手

(判任官級) 四十四人、事務官 (高等官級) 二人 日本人及支那人ヲ含ム

事業 (臨時)

一 建築 研究所図書館博物館印刷所官舎等ノ建築
一 四庫全書ノ出版 本事業ニテ計画スル出版事業中最
大ナルモノニ属シ之ヲ臨時事業トシテ最初十ヶ年間
ニ完成セシムルコト

【丁八】

此事業ヲ特ニ最初ニ行ハントスルハ支那人並ニ欧
米人ヲシテ我国ノ行ハントスル文化事業ノ真精神
ノ那辺ニ在ルカラ知ラシムルニ最 (適當ナル) 都
合ヨキガ為メナリ

一字書索引類ノ編纂刊行 支那文化研究上從來最欠陥
ヲ感ゼシ此種ノ書籍ヲ編纂刊行スルコトハ研究ニ着
手スルニ先チテ為スベキ最緊要ノ事ニシテ独リ本研
究所將來ノ研究ノ基礎の事業タルノミナラズ一般研
究者ヲ弥益スルコト亦頗ル大ナルモノアルベキナリ

經費

一 經費八年額約百万円トス

一 最初十ヶ年間ヲ準備期トシ此期間ノ初ニ於テハ百万
円中ノ大部分ヲ臨時費ニ充當シ其後年ヲ経ルニ從ヒ
臨時費ヲ減少シテ經常費ヲ増加シ第十一年度以後ハ
年額約百万円スベテヲ經常費ニ充當ス
經費ノ細目並ニ最初十年間ニ於ケル臨時費通減、經
常費累加ノ割合ハ別表ニ詳ナリ

【丁二】

經費見積

建築費

百五十万円	事務室研究室	五年若クハ
百五十万円	圖書館	十年ノ繼續事業
二百万円	博物館 附会館	トスルコト
五十万円	住宅及宿舍 (研究員事務員等)	
〈?〉	印刷所	

人件費

廿二万五千円	給料旅費	〔数字書き入れあり〕
四万円	研究費	写字写真ノ助手等
五万円	嘱託費	
十万円	研究員養成費	支那人教育ヲ含ム

〔数字書き入れあり〕

物件費

五十万円

材料購入費

書籍遺物

十万円

蒐集費

十万円

印刷出版費

〔数字書き入れあり〕

経費見込	建築費	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円
研究費	調査費	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円
印刷費	製本費	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円
雑費	その他	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円	百五十万円

同文書【丁二】

人

文

第四六号

一九九九年十一月一八日

京都大学人文科学研究所発行

共同印刷工業

非売品